



最後の砦として

コロナ禍において、政府機関である防衛省・自衛隊が果たした役割について聞いた。

自衛隊中央病院長

防衛技官 福島功二さん

コロナ対応と通常救急を両立

— 当初の最大の任務は、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の患者対応だったと伺いました。

まだウイルスの性質がよく分からない中でした。自衛隊中央病院が受入機関の1つになり、2020年1月30日から3月半ばぐらいまでに128人の治療にあたりました。

厳しい状況下での対応であり、受入病棟が1つでは足りず3棟に増やし、他の病院から医療スタッフの応援もいただきながら、一番多い時で102人の患者を受け入れました。

— その後、春に感染第1波、夏に第2波と、市中感染者が急増します。

私が病院長に就任したのは2020年12月、第3波の始まった頃です。当病院は最も危険な感染症にかかった患者も受け入れることができる「第一種感染症指定病院」に東京都から指定されています。就任して間もなく、東京都からコロナ感染者の受け入れを増やしてほしいと要請がありました。そこで、ダイヤモンド・プリンセス号への対応が終わり、いったん縮小していた受け入れ体制を再び拡大することにしました。

感染症が広がると通常の救急疾患への対応に影響します。スタッフが足りない、救急車が出払っているなど、医療体制の逼迫^{ひっばく}を招きかねません。当病院には自衛隊関係者のほか、一般患者も来院します。新型コロナウイルス感染症への対応と、手術や入院が必要な患者に対する二

次救急をどう両立させるか。病棟を改編するにあたり、コロナ患者用の病床を増やすとともに、救急搬送されてくる患者がコロナに感染しているかどうか分かっていない場合に備え、検査用のベッドを7床確保することにしました。コロナに感染していると判明すればコロナ専用病棟へ、コロナでなければ一般病棟へという仕組みをつくったところ、うまく機能し、その後の感染拡大の波でも感染症対応と二次救急を両立させることができました。

使命感と励ましの声

— 2021年5月24日から自衛隊によるワクチンの大規模接種が始まります。

5月の連休明けに菅総理(当時)から自衛隊に、最後の砦として大規模接種センターの運営にあたるよう指示がありました。日本にはない、しかも初めてのメッセンジャーRNAワクチンだったので、副反応など未知の部分も少なくありません。防衛省・自衛隊を挙げて取り組むことになり、当病院が中心となって会場の運営要綱の作成に着手しました。統括者として私がスタッフにお願いしたことは次の4点です。

1つ目は来場者の不安にしっかり対応してほしい。例えば、接種会場は同じ建物の複数階を使用します。会場に入ったらどこへ行けばよいのかといった心配をせずに安心して接種を受けられるようにしなければなりません。

2つ目は綿密な時間と数字の管理。1日1万人もの人員を受け入れるためには、受付→予診